
まほらんぶる(仮)

ノッポガキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まほらんぶる（仮）

【Nコード】

N0240Y

【作者名】

ノッポガキ

【あらすじ】

とある赤き翼の奮闘記録の続編（一応）の物語。

とりあえずカオスな展開になっていたり、他作品クロスだったり作品を超えたCPだったり、色々はちゃめちゃんな展開が始まります。

ああ、シリアスに出来るのかコレ？

な雰囲気ですが気にしないでください。

あと、サザエさん方式ではなく、時間は進行していきます。

ベースはネギまの世界のため他作品は設定の改変とかしています。
あまりに非常識なキャラは出ません。

出す予定の作品を語る予定は無い。

メインは語るけどね。

とりあえず、ネギま、リリなの、ボクタイ、とあるが絡んでいます。
キャラ紹介は一話につき一人ずつあとがきで書く予定。

そう、それはプロローグ by ジャンゴ (前書き)

続編のプロローグが書けたんで投稿します。

とりあえず、シリアスはやらない方向で。

いきなり色々端折ってますが気にしないでください。

キャラクターの設定はあとがきでやります。

そう、それはプロローグ by ジャンゴ

ある場所、ある日、最強のヴァンパイアハンターの子孫が誕生した。だが、その子供の両親はすでにいなく、少年は形見の機械銃と手甲に名のかかれたドッグタグのみを持っていた。

少年は同じ日に生まれた少女の両親に引き取られた。

少女の名前は八神はやて

少年の名は……

「はよ、おきひんかい！」

「あと……2分34秒」

「細かく指定するくらいならおきろー!!」

少年の名は日輪^{ひのわ}ジャンゴ。

伝説のヴァンパイアハンター、ジャンゴの血を引く太陽仔^{たいようし}の少年だ。そのままご先祖様の名前にあやかっただけらしい。

「まったく、しっかりしろよな！」
『全くだぜ!』

最初に喋った赤毛の少女はヴィータ夜天の書の守護騎士の一人。
次に喋った赤い物体……生物には見えないが、この赤いのは炎の精
霊獣アーシユラ。

「たるんでる証拠だ」
『全くでござる』

ピンクの髪の長身の女性はシグナム。騎士道精神をもつ女性だ。
後ろにいたのは風の精霊獣オトフリート。サムライ気質である。見
た目はフクロウっぽい。

「まあまあ良いじゃないですか。平和なのは良いことですよ」
『そうそう』

金髪の女性はシャマル。おっとりとした温和な女性である。ただし、
料理の腕は殺人級。
隣に座っていたのは地の精霊獣トーベ。転進欄間で、ニンジャっぽ
い外見のモグラ。

「まったく、なにをやってるのやら」
『結局、いつもどうりの展開なのですけれどね』

大きいほうの犬は、はやての守護獣ザフィーラ。獣人形態にもなれ
る。その場合、大男になる。
小さいほうの犬は、氷の精霊獣リザ。お嬢様気質の持ち主。

「まあ、良いのではないですか？」

彼女の名はリインフォース。夜天の書の管制人格である。

彼らの出会いははやてたちの誕生日までさかのぼる。

闇の書とよばれる呪われたアイテムの主となったはやて。

闇の書の主を守るため現れたのがヴォルケンリッターと呼ばれるシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの四人である。

始めは、堅苦しい感じだったのだが、はやてたちと生活するうちに砕けてきた。

精霊獣たちはジャンゴに呼応して現れた存在であり、本来はまだ現れないはずだったのだが、闇の書の力に反応して、ジャンゴの力が早く目覚めた。

太陽仔の血に眠る浄化の力により、あっさりと闇の書は本来の夜天の書に戻ったことにより、全員が混乱してしまったとだけ言うところ。

具体的には、一時的に太陽の精霊化し、その光で浄化してしまった。

その後、リインフォースが解放されたり、闇の書を破壊しようと考えていたギル・グレアムがやってきてその光景を見て啞然としてしまったりと、色々あった。

ちなみに、ジャンゴはその時、必要ないからとギル・グレアムからデバイス『デュランダル』を貰っていた。

そして、時期はクリスマス間近。

ジャンゴたちのいる地区には喫茶翠屋があり、魔王と呼ばれる魔法少女が住んでいる。

北のほうには召喚獣を用いた文月学園が立っていたり、少しはなれたところには、改造制服上等な御伽学園があったりする。

町の中央には世界樹と呼ばれる多きな木が聳え立つ。

街の東のほうにはストレイキャッツと呼ばれる店があったり、そこから南のほうへいくと海が広がっていたり、離れ小島には何かの建物が建っている。

西のほうには金持ちが沢山通う白皇学院があったり、どこかは分からないが濃いキャラばかりが集まる開盟学園があったり、

山のほうには忍者を育成しているという噂があったり、魔法使いや、悪魔、天使とかもいるといわれている。

大学もあり、教育機関のほとんどがこの都市で揃ってしまふ。

大学には沢山の天才達があり、日夜自分達の技術を競っている。

その他、語りつくすのは不可能であろう。

様々なものがあるせいか、その全貌を知る者はいない。

そして、学園都市を治めているのは7人の学園長。

第1学園長	近衛	近右衛門 ^{このえもん}
第2学園長	荒神	妖橙 ^{らんぷ}
第3学園長	藤堂	カヲル
第4学園長	三千院	帝 ^{みかど}
第5学園長	猿飛	ヒルゼン
第6学園長	ガトウ	カグラ
第7学園長	織斑	千冬 ^{ちふゆ}
		ヴァンデンバーグ

幾人かの中2な趣味のせいでもこの悪の組織だと突っ込まれそうになるが、仕事は真面目している。
もっとも若い千冬と真面目なガトウ、ヒルゼンぐらいしか仕事していないが。

これは、学園都市に住む少年少女たちの麻帆良で起こる慌しくも平和な非日常を描いた物語です。

そう、それはプロローグ by ジャンゴ（後書き）

まずは主人公。

日輪 ジャンゴ

両親はすでに他界。

太陽仔の血のほかに、月光仔の血も流れている。また、ヴァンパイアの血も流れているが未覚醒。

見た目はDS版のジャンゴそのまま。性格も同様。

少し、ツツコミ気質がある。たまにボケも兼ねる。

装備、服装、家族関係以外はDSジャンゴ。

形見というか、遺産で太陽銃『ガン・デル・ソル』と太陽機『ソル・デ・バイス』を持つ。

ギル・グレアムからは『デュランダル』を貰った。

また、この世界のデバイスは前作を読めば分かる通り、御坂美琴が作った。

現在は、御坂作のオリジナルと呼ばれる100本を元に作られたものがほとんどだが、『デュランダル』はオリジナルの100本のうちの10本目。

精霊獣、4体の主でもある。

ソルジャンゴにトランスするにはパイルドライバーの魔法陣を取り込む。

魔力光は白に近い橙。魔力変換資質は「太陽」。強い浄化の力を有

する。

『ガン・デル・ソル』はフレームがドラグーンのみ。見た目的にはゾクタイのものをイメージしてくれば良い。精霊獣の力を借りれば属性変更可能。

『ソル・デ・バイス』は最高クラスの魔法発動体として機能する。それ以外はほとんど原作通り。

ぶっちゃけ、戦闘シーンは少ないんであまり使わない設定とかありそう。

痴話喧嘩？　　ちゃう、これはOSHIOKIや　byはやて（前書き）

うん、どうしてこうなった。

なのはとフェイトをどう関わらせようかな、って考えて、手っ取り早いのは戦闘の際に結界を張ることかな。

っておもって……戦闘の理由を考えたらこうなった。

ちなみに、なのは、フェイト、ユーノは魔法生徒です。

ぶっちゃけ、この麻帆良には魔法使い以外にも裏と関わりのある人物が多すぎます。しかも、魔法使い側全てを把握してるわけではなかったり、正義至上主義は無かったり、（上条さんのおかげで）

カオス過ぎることになってます。

主人公はDS版ジャンゴと思ってくれないかもしれませんが。装備などが違うだけなので。見た目は服装以外同じなので。

痴話喧嘩？
ちゃう、これはOSHIOKIやbyはやて

クリスマスを間近に控えたある日のこと。

〜ジャンゴ〜

「それで……あの女の子とはどういう関係なんや？」

「いえ、道案内をしたただけですが……」

「それで、なんで道案内しただけで抱きつかれとるんやあああああ
！！！！」

なんでいきなり魔法弾撃ってくるんだああああ!?

「くっ、結界！」

とりあえず、周りに被害が出ないように結界を張る。

下手すると、誰かに気づかれるけど、張らないよりはマシだろう。

デュランダルもってきていて良かった……

「この、浮気もんがあああああああ……！！！！！！！！！！」

「ラグナロクはダメだってええええええええええええ！?!?!?!」

?!?!
」

現在、はやてにフルボッコにされそうです。

どうしてこうなったかというところ。

1. 道に迷っていた女の子がいた
2. 道案内してあげた
3. 喜びのあまり抱きつかれた

こんな感じだ。

本当に、なんでだ？

「シグナム！」

「は、はっ!!」

「OSHIOKI、手伝ってくれへんか？」

「お、仰せのままに!!」

シグナム……そんな、悲しい顔するくらいならはやてを止めてくれ。

「すまぬ、主はやてのご命令には逆らえないのだ」

「ぐ、仕方が無い」

シグナムと念話をするが……説得できそうに無い。

「とりあえず、落ち着くまで戦うしかないのか……」

「ヴィータにシャル、ザフィーラもおいで……」

ああ、はやての目から光が消えていく……

「すまねえ、兄貴」

「すみません、ジャンゴ君」

「ジャンゴ、生きてくれ」

謝るくらいなら止めてってば……ザフィーラ、俺だって生きたい、でも……

「大丈夫や、ちょっと……OSHIOKIするだけや」

はやてがソレを許しそうに無いんだ。

「くっ、アーシュラ！ トーベ！ オトフリート！ リザ！」

『ちよ、なんでこんな時に呼ぶんだよ！？』

『まだ死にたくないよ！』

『目に光がないでござるな』

『……ごめんなさいね』

「『『『え？』』』」

『わたくしは今回、はやてにつきますわ』

「『『『まさかの、裏切り！？』』』」

『ジャンゴさんには少し反省していただきたいのですの』

リザ!?

「ほな、いこかりザ」

『ええ、行きましよう……いえ、逝かせましよう』

い、いやだあああああ!?

「ぐっ……アーシュラ、トーベ、オトフリート……バースト!……!」

三体の属性を解放し、一時的に強大な力を使えるようにする。

『』『うおおおおおおおおおおおおおお!……!……!』

「こっちもいくで……トランス!」

「え? なんて使えるの!」

ああ、はやての羽がでつかなくなっていくなあ……

『現実逃避している場合ではないと思うでござるよ』

「分かってるんだけど……なんでトランス・ダークが使えるんだよ……」

「ふふふ、響け終焉の笛! ラグナロクブレイカー!……!……!」

だからソレはだめだろおおお!?

「『』『ぎゃあああああああああ!?!?!?!?!?』」

くなのはく

私、高町なのは。小学3年生なの。

友達のフェイトちゃんと下校している途中、結界が張られる反応がしたの。

「フェイトちゃん！」

「ああ、なのは行ってみよう！」

結界の中では……

「この、浮気もんがあああ！！！！！」

「だから何の話ですかあああ！？」

激しい魔法戦をしていた二人がいました。

周りには知り合いと思われる人たちと……精霊のような子たちもいました。ただ、そのうち3体はボロボロでしたが。

「あのー、一体なんですかコレは？」

「む、魔法生徒の方か？」

「はい、一応そうですが……」

きれいなお姉さんだなあ

「一応、あの二人の会話を聞けば分かると思いますよ」

今度は、おっとりとした感じのお姉さんが話しかけてきました。
言われたとおりに会話？ を聞いてみると。

「そんなに巨乳がええんかああ!!」

「別に巨乳じゃ無ねえ!?! ていうか同じ年くらいだったぞ!?!」

「うるさい!! 鼻の下伸ばしとったろ!!」

「伸ばしてねええええ!!?!?!?!」

ああ、なるほど……

「ただの痴話喧嘩なの」

「痴話喧嘩？ ちゃう、これはOSHIOKIや」

なんだろう、あの子の言っていることに私も同感なの……でも、

「それじゃだめだよ」

「なんや?」

「暴力じゃなにも解決しないよ……だから、OHANASHIしなくちゃ」

「なのはが暴走した……」

「せやな、OHANASHIのほうがよさそうやな」

くジャンゴく

なんだ、敵が増えた……っていうか、状況が悪化したような……

「「うふふふ」」

なんであの子も参戦してるの！？ 初対面なのになんで意気投合してるの！？

「全力全開！！ スラーライト……」

ってアレはデバイス！？ しかもさっき全力全壊って聞こえた気が……

「響け終焉の笛！！ ラグナロク……」

さっきより魔力を溜めてる！？

「ぐっ……トランス・ソル！！」

とっさにパイルドライバーの魔法陣を展開し、圧縮させ、体に取り込む。

『はああああ！！！！』

そうすることで、一時的に精霊化することが出来る、俺の一族の奥

義。本来は太陽の精霊と一体化する技らしいけど、それにアレンジを加えることで精霊との融合なしでも使えるようになった。

『最大防御!!!』

「ブレイカアアアアアアア!!!!!」

全魔力を防御に回すも、二人から放たれた攻撃はその魔力を遥かに超えていた。

あ、死んだなこれ。

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!?!?』

くはやてく

「はっ、いかんやりすぎてもうた!?!」

「ああ!?! 私もなんで一緒になって攻撃してたの!?!」

「「「「『今頃気がついたのかよ!!!!!』」」」」

あれ、ところで……

「どちら様ですか?」

「ええっ!?! 今頃それを聞くの?!」

「ははは、カオスだね」

金髪の子の眩きが妙に耳に残ったわ。

くジャンゴく

非殺傷の腕輪（グレアムさんに貰った）をつけていたのになんでロボロになってるんだ俺……

「あ、気がつきました？」

「ああ、シャマル……あの後どうなった？」

「なんか、あの場に居合わせた魔法生徒さんたちと意気投合しちゃったみたいで、ヴィータちゃんも入れた4人で遊んでますね」

「……ねえ、理不尽って何かな？」

「……………受け入れるしかないもの、ですかね」

「そんな、後ろ向きな悟りは……………いやだなあ……………」

アーシュラたちも3日は動けなさそうだな……………

「ああ、あの目は怖かったな……………」

「ああ、いわゆるヤンデ……………」

「それ以上言わないでくれ、なにかを失いそうなんだ」

「ジャンゴさん、いつもみたいに、『いつも心に太陽を』って感じで元気出してください」

「日はまた昇るって言うだろ……………裏を返せば沈んでる時はあるんだ

よ……必ず昇るから今は休ませてください……」

これが、俺の後に魔王と呼ばれる少女との初遭遇でした。

痴話喧嘩？　　ちゃう、これはOSHIOKIや　byはやて（後書き）

八神　はやて

八神家ヒエラルキー頂点。

原作と違い、リンフォースが完全に生存。

いつかリンフォースの妹を作ろうかなと考えている。

さらに、ヤンデレ化している面もある。

なぜか、トランス・ダークが使える。

その際、背中が羽が大きくなっていき、黒いオーラを纏う。

魔法の威力が跳ね上がる。

別に、吸血鬼になるわけではない。魔力光が黒くなるが。

ちょっと、やりすぎたかな。と思っている。

関西弁だし、ひまわり娘の子孫か後継者でも良いかなとか考えている。

えっ!？ デバイスの生みの親!？ b yなのは(前書き)

前作、『とある赤き翼の奮闘記録』を見てないと分からんネタがあるかもです。

なんか、バカテスの霧島さんみたいになってる人がいるな。
まあ、いいか。キャラ崩壊上等。

えっ!？ デバイスの生みの親!？ b yなのは

くジャンゴく

二人のブレイカーを喰らった翌日。

「あ、グレアムさんどうかしましたか？」

グレアムさんから電話がかかってきた。

『ワシの知り合いにデバイスの点検をやってくれそうな人がおつての、君の太陽銃なども見てみたいといっていたので会ってくれないかとおもつての』

「まあ、いいですけど…その人ってどこに居るんですか？」

『その人も麻帆良に住んでいるそうだ』

「え、そうなんですか？」

『ああ、でその人の名前は、上条美琴という。たぶん今はロボット研究所のほうにいますと思うぞ』

「ロボット？」

『今はロボットの研究をしているそうだから。ロボット研究会の部室がある大学にいるはずじゃ』

「わかりましたー」

で、そのあと、はやてたちにもそのことを伝える。

「まあ、あの人には色お世話になったしな。うちもいつてええか？」

「いいんじゃないの？」

「「わたしたちもいっていい？」」

あ、たしか……フェイトと魔王

「OHANASHI」

じゃなくて、なのはさん。

「って、いつの間にいたんだ二人とも」

「さっきなの」

「ねえ、私達も行っているかな？」

「私からも頼むわ」

「まあ、いいんじゃないか？」

「わーいなの。ところで、その会に行く人ってどんな人？」

「あ、詳しくは聞いていない。名前は……たしか上条美琴だったかな？」

「ええええええ！？」

「どうかしたのフェイトちゃん？」

「どうしたんや？」

「なんだよそんな大声出して」

「だって、その人って……デバイスの生みの親だよ！？」

「「「……………なにいいいいいいいい！？」」」

さすがにビックリした。

くはやてく

いま、こちらは大学のほうまできとります。

シヤマルが保護者としてついてきとりますが、ほかのみんなはお留守番です。

あんまり大人数で行ってもあれやし。

「おおきいの……」

「っていうか、あの形は……」

「ツツコンじゃいかんと思うで」

そう、ロボット研究会の建物の形は……ホワ○トベ○スだったんや。

「えっと、グレアムさんが教えてくれた待ち合わせ場所は……」

「って、ジャンゴ君。驚いてないんか？」

「麻帆良にとってこんなのはむしろ当たり前。この程度で驚いていたらやっていけない」

「……………確かにそうやったな、学園都市って非常識すぎるから気にしたら負けやったな」

魔法使いは実際におったし、この分だと天使や悪魔、忍者にサイボーグに超能力者までいるってのも本当かもしれんし。

「お、あの人かな？」

ジャンゴ君が指差したほうには、うちらと同年の女の子と一緒にいた見た感じ若い女の人がいた。女の子は妹さんやろか？

くジャンゴく

「えっと、あなたが上条美琴さんですか？」

「ええ、グレアムさんから話は聞いてるわ。あなたがジャンゴ君ね。で、そっちの子達は……」

「始めまして。高町なのはです」

「フェイト・T・ハラウオンです」

「ジャンゴ君の妻の「ちょっとまで——バゴツ」妻の八神はやてです」

「い、一応保護者のシャルマです」

「よ、よろしくね」

皆の頬が引きつってるな……ってか、頭痛い。

「そちらの子は妹さんですか？」

フェイトが美琴さんに聞いていた。

「妹？　ちがうちがう。私の娘よ」

娘？　むすめ？　MUSUME？　本当に？　娘……………

「「「娘！？」」「」」

「ほら、やっぱり親子には見えないんだって」

「えー、そんなこと無いと思うけどなー」

いや、正直、年の離れた姉妹にしか見えない。

っていうか何歳だ横の人！？　10代にしか見えないぞ！？

「あ、皆さん始めまして。上条さんは上条麻琴といいます」

なんか、この子も特徴ある喋り方をするな……

「っていうか、美琴さんって何歳なんや……」

たしかに気になるな……

「女の人に年を聞くのはマナー違反って親に教わらなかった？」

あ、美琴さん、それタブー。

「（ズーン……）」

「え、どうしたの!？」

ああ……空気が重くなっちゃった。

「すみません、はやてちゃんの両親は……」

「あ、私のほうこそデリカシーが無かったわね……」

お、お通夜な空気が………

空気が重いのでキングクリムゾン!

「へー、コレが太陽銃かあ」

何とか空気が戻ってよかった……え、どうやって戻したかって……
……ここじゃ言えない。

というより、要求されたというか……

まあ、それは置いておこう。

ちなみに、女子ズは向こうで話してるな。麻琴は同い年らしい。つ
ていうかクラスは違うけど同じ学校だった。なのは達も同様。

「やっぱり、デバイスの参考にした技術に近いわね」
「デバイスの参考?」

「ええ、昔の道具らしいんだけど、参考になっているものがあるのよ」
「へー」

「あ、お礼にデバイスの点検してあげるわよ」

そういえば、デュランダルを貰ってから一度も点検してなかったな
……

「じゃあ、お願いします」

「はい、おおデュランダル懐かしいわねー」

「懐かしい？」

「コレ、昔私が作った奴なのよ。たしか、10本目だったかな」

「へー」

「あの……美琴さん、私達のデバイスも見てもらって良いですか？」

お、なのはにフェイトも……まあ、生みの親って言うくらいだから
見てもらいたいのは分かる。

「な、………レイジングハート!？」

「……まさかと思えますけど……美琴さんが？」

「ええ、レイジングハートは私が一番最後に作った100本目にし
て最高傑作……ただ、使い手をかなり選ぶんだけど……かなり相性
がいいみたいね」

まあ、あの砲撃を見た限り間違い無さそうだな。

「……ふっふっふ、久しぶりに本気で調整……いや、改造したくな
ったわね」

「」「え?」「」

「三本とも、私が魔改造してやるわ!!」
「ああ、ママの悪い癖が……」

ああ、行っちゃった……

「れ、レイジングハート持ってかれちゃったなの……」
「ば、バルディッシュが」
「壊しはしないと思うけど……不安だな……」

仕方が無い。

「パイロットラップの魔法を完成させるか」
「それって、この前から作ってるっていうやつか？」
「うん、太陽属性の魔法は俺しか使えないから必然的に自作するしかない」

「「魔法の自作!?!」」
「なにを驚いているんだ三人とも」
「デバイスも無しに一から魔法作るって非常識なの!?!」
「っていうか太陽属性ってなに!?!」
「上条さんビックリよ!?!」

……

「自作って非常識なのか？」
「「認識の違い!?!」」

そのあと、魔法を作ることの大変さを教え込まれた。

「そういえば、さっきも言ったけど太陽属性って？」

「ああ、それを説明してなかったな。用は魔力変換資質でしか使うことの出来ない属性の一つで、魔を浄化する光属性とでも言うべきかな……若干違うんだけど、まあ、こんなところかな。ウチの一族にしか遺伝しない資質らしいけど」

まあ、魔法体系がそもそも違うんだけどね。

「へー、そんな変換資質があったんだ」

「そういえば、フェイトちゃんも持ってたよね。確か電気の」

あ、魔力変換資質ってのは呪文などに頼らず、先天的に魔力の属性を変化させることの出来る資質のこと。

「太陽属性ってどんなのがあるんですか？」

横にいた麻琴が聞いてきた。

「あー、魔やヴァンパイアとかを浄化するのに特化した呪文が多いな。単体の威力もそれなりに大きいけど。あと、エンチャントとか」

砲撃とかには向いていないから太陽銃とかがあるんだけどな。

「へえ」

「そういえば、麻琴ちゃんも魔法使いなんか？」

「いえ、超能力者です」

あ、いたんだ超能力者。

「パパとママの遺伝で私も超能力をうまれたときから持っているんです。母は後天的に獲得したそうですが」

「どんな能力なの？」

「一応、発電能力です」

「一応？」

「はい。まあ、見ていてください」

麻琴が手のひらを上に向けて、放電させる。

「黒い電撃？」

「はい、電撃としての威力も高いんだけど……パパの能力も混ざってるみたいで」

「お父さんの遺伝？」

「ええ、パパは右手にあらゆる異能を打ち消す能力を持っているんです」

それって、魔法使いとかの天敵だね……ってか、チート。

「私の電撃にもその特性があるんです」

「おや以上にチートなんじゃ……」

「なっ!？」

「確かに、魔法と打ち合えば必ず勝てると思うんやけど」

「「同じく」」

「でも、現代兵器には……電撃自体普通に出るのなら兵器もききま
せんよね」

「で、でも……魔力はそれほどありませんし、気も上条さんは少し
だけしか使えませんよ?」

「この年で気を使えるだけでも十分だと思うんだ。っていうか気っ
てあったんだね」

かめ〇め波って撃てるかな?

そして一時間後だよ、キンクリ!!

「ふー、出来たわ」

「は、早かったですね」

「思いのほかはかどったわ」

「そして、コレがバルディッシュ・アサルトにレイジングハート・
エクセリオン……そして、デュランダルよ」

「って、デュランダルは未改造ですか!？」

「いや、名前が決まらなかった……というより、単体では使用不可のシステムをつんだのよ」

「単体では？」

「ちょっと、太陽銃を出してみて」

まあ、言われたとおりに出しますよ。

「って、ええ!？」

突然、デュランダルから魔法陣が出て、ガン・デル・ソルを飲み込んだ。

そして、魔法陣に二つの武器が包まれ、光が晴れると、一つになっていた。

「おお、成功みたいね。これぞ、デバイスと太陽銃を融合させた、太陽銃ウィッチ!!」

いや、コレでどうしろと……

「砲撃形態とも言うわね」

「聞いてません」

「大丈夫、『ページ』の一言で解除されるから」

「……『パージ』」

お、元に戻った。

「って、コレでどうしろと？」

「……その場の、ノリでやってみただけ!!」

「オイ!!!!」

「あと、デュランダルにいくつか魔法を入れて置いたのと、君が使う魔法体系にも対応させておいたから」

「ってか、一時間でよく出来ましたね」

そのあと、美琴さんはなのは、フェイトにも説明をしてこの日は解散することになった。

帰る前に、

「あ、元旦って予定ある？」

「初詣に行こうかなってくらいやけど」

「京都に知り合いが集まるからあんた達も一緒にどう？」

「え、いいんですか？」

「いいわよー、なんか面白そうだし」

「そんな軽いノリで……」

「うち、結構大人数なんやけど……」

「大丈夫だいじょうぶ。向こうも結構集まるから同ってことないって」

「あのー、私たちもいっていいんですか？」

「もちろんよー。ただ、魔法関係者ばかりだから。事情知らない人は無理かもしれないわねー」

「じゃあ、友達が後二人いるんですけど……」

「いいわよー」

「ノリが軽いな……」

〵三人称〵

実際は、美琴が両親のいないはやて、ジャンゴ（グレアムから聞いている）たちを気遣って誘っているのであった。人を無条件に助けようとするお姉さまは健在である。

そして、元旦に待ち合わせすることにして、解散した。

その前に待ちに待ったクリスマスが待っている。

えっ！？ デバイスの生みの親！？ b yなのは（後書き）

色々暴走しておりますね。

今回のキャラ紹介はこの人。

高町 なのは

ほとんど原作通り。

ただ、リンカーコアとかはこの世界にはない。

麻帆良に翠屋がある。

すでに、魔王の覚醒が始まっている。

闇の書事件は無かったのでデバイス強化は美琴のノリで行われた。

ちなみに、管理局は魔法世界の組織。メガロメセンブリアが崩壊したため。現在の首都の名前はミッドチルダ。

ユーノもいるが、フェレットではなく。人間だと知っていた設定。ユーノについては後日。

キャラ崩壊が激しい回でした。

元旦にあるフラグを立ててますね。

この次のクリスマス回で更にあるフラグがたちます。
具体的にはある武器を貰って、元旦回で京都にて……

ネタバレ防止。

ああ、美琴は大人になったらこんなキャラになりそうだなと思ってます。美鈴に似て。

麻琴の設定に関して、予想している人もいると思うので一言。

麻琴は酒には弱い。

そして、彼女の能力の性質上。一方通行ですら勝てない。キャパシティダウンなども効かない。かなりのチート能力です。

名前はまだ決めてない。

クリスマスイブの朝は寒いな by ヴァイター (前書き)

ほーい、クリスマス回とかだよー

相変わらずこっちはノリで書いてるよー。

短いよー

ねた話だよー

クリスマスイブの朝は寒いな by ヴィータ

くジャンゴく

うん、どうしてこうなった。

「まあ、そこらに腰掛けてください……あら、ここはどこかしら？」

「あんたの家だろ……！」

ヴィータ、ツツコんでいたらきりがないぞ。

「兄貴、平気そうだな」

「ん、違うぞ、なんでこうなったのか考えているんだ」

「ああ、現実逃避か」

そう、ヴィータとクリスマスケーキを翠屋に取りに行っていたんだけど……途中、なんか、ぼわぼわした女の人が出て、道に迷っていたみたいだから案内しようと思ったんだけど……

家の前で迷うってなんだよ。

しかも、インターホンが分からないってなんだよ。

いや、ものが分からないじゃなくて、ボタンってどこにあるのかだって。

目の前にあるよ。一つしかないよ。

で、何とか、家の中にはいつて貰ったんだけどぜひお礼をといわれて連れ込まれた。

けっこう……いや、かなり大きな和風の屋敷に。

「どうもありがとうございます鷺ノ宮初穂といいます」

「日輪ジャンゴです」

「ヴィータだ」

「まあまあ、ご丁寧にどうも」

「あの……ところで、この噛み付こうとしている人はどなたですか？」

なんか、俺の首筋に牙を立てている女の子？　がいた。

「なんか、いいにおいがしたんじゃが……やめておくのじゃ。コイツの血すったら死んでしまう」

「なんか、ひどくね!？」

「たわけ、おぬしの血には強い浄化の力が備わっておるから吸ったら若さを保てそうに無いのでの」

なんだ、この人は……？

「すいません、おばあさまが」

「い、いえお気になさらず」

若さを保つとか、この家に張ってある結界とか……間違いなく裏の人間だよな。

「あのー、先ほど日輪といいましたよね？」

「ええ、そういいましたが」

「もしかしてヴァンパイアハンターの一族の？」

「たぶんそうですね」

「たぶん？」

「両親にあったことは無いんです。もう他界したそうですが」

「あ、すいません」

「いえ、お気になさらず」

「あのー、ところでそちらの方は人間ではないような？」

「「!？」」

な、気づかれた!？

「あ、驚かせてスイマセン。うちはゴーストバスターをやってるものでそういうのに敏感で」

「は、はあ……」

そのとき、どこからか、あうーという声が聞こえてきた。

とりあえず、声のしたほうへ向かってみると。

「あうー、あうー」

なんか、小さい女の子がへんな化け物に囲まれていた。

「あら、伊澄」

「あのー、娘さんが大変なことになってますよ」

「あれは私の娘の伊澄です」

「分かってますよ!!　だから大変なことになってますって!!!!」

とりあえず、助けたほうがいいだろうな。

ガン・デル・ソルをとりだし、エネルギーを溜める。

「エンチャント・ソル!　チャージスプレッド!!」

放射された光。浄化のみを高めて人体には影響の出ないように調節

したスプレッドを放つ。

変な化け物は予想以上に弱くて、全部消滅した。

「あら、ガン・デル・ソル……間違いなく、あの一族の方のようですね」

そういや、うちの一族にしかコレ使えないんだっけ。

「娘も助けていただきましたし、何かお礼を……そうだわ」

いや、お礼とかいいのに……あの、木刀？

「なんですか、この木刀？」

「コレは鷲ノ宮家に伝わる、かの天才刀鍛冶、名匠・正宗が作った最強の一本……木刀・正宗です」

「……名匠、疲れてたのかな」

「コレを差し上げます」

「って、そんな大事なもの（たぶん）人にあげていいんですか!？」

「ええ、倉の中に閉まったきりでしたし。助けていただきましたし、貴方の一族にはお世話になりましたから。こういう形でしかご恩を返せそうに無いんです」

なんか、断るのも悪い雰囲気だな。

「あれ、そういえば俺の両親のこと知っているんですか？」

「ええ、一度だけお会いしました。かなり、豪快な方でした……」

なんか、遠い目だな。このぼわぼわした人が苦勞したのか？

「なぜか、私と会話すると大声でツツコミを」

うん、アンタのせいかな。

結局、木刀・正宗をもらうことになった、

女の子や小さいばあちゃん？ も、持って行っていつてきたしね。

ああ、マトモに会話できるひとがいなかったなあの家。

疲れた。

くはやく

ジャンゴ君たちがケーキ持って来てくれたのはいいんやけど……

疲れきっておるな。

「どうしたんや、二人とも？」

「……パーティーが始まるまで寝させてくれ」

「……わたしも寝てる」

なんか、木刀をもっとったし、ヴィータも隈ができとったなあ。

ジャンゴ君から知らない女の人の臭いがしたんやけど……あのようすじゃ、浮気やあらへんよね。

念のためにヴィータにもついていってもらったし。

くジャンゴく

「ふああああ、よく寝た」

なんか、もう関わりたくないな。あの家。

とりあえず、プレゼントを交換したり、ケーキ食べたり、色々やりました。

朝の出来事のインパクトが強くてうまく思考がまとまらないんだよ。

「あ、ジャンゴ君。知らん女の人の臭いがするから私と一緒におふ
「それ以上言うなよ」……むー」

ああ、なんでこうなるの。

『そういう、星の下に生まれたんでしょ』

「ねえ、リザ。ちょっとOHANASHIしようよ」

『ジャンゴ!? あなたまで魔王になってはだめよ!?!?!?!?』

ああ、シャマルが悪ふざけで酒を出してしまったからだろうなー

んで、翌日

はい、はやてが隣に寝てたよ……

気にするのやめよう。

さて、大掃除と元旦の計画立てないと。

忙しくなりそうだな……特に元旦。

クリスマスイブの朝は寒いな by ヴィータ（後書き）

うん、短い。

キャラ紹介はヴィータ

八神 ヴィータ

ヴォルケンリッターの一人。

ジャンゴのことは兄貴と呼んでいる。

はやては小学校に通わせようかなと考えている。

原作との違いはあまり無いと思う。

ココではけっこう巻き込まれるキャラ。

精霊獣アーシュラと馬が合うらしい。

ハヤテのごとくから鷺ノ宮家出演。

木刀・正宗がジャンゴの手に。

そして、木刀を持って京都へ

これで何が起こるか分かる人もいると思います。

あ、ラブひなの話もやろうかな。

そうだ、京都行こう b v 麻琴（前書き）

タイトルはありきたりですねー。

あ、ラブひなのストーリーも絡める予定なので原作に追加しました。

ふっふっふ、主人公には災難が降りかかるの（予定）だよ。

というわけで、元旦・京都編スタート。

あ、元日で作品内は1998年だと思えます。まだ、主人公達は3年生。まだ、ラブひなのストーリーは始まっていない時期なので絡めようと思えば絡められまくれる！！
どこで絡めるかは決めてるんだけどね。

そうだ、京都行こう b v 麻琴

（麻琴）

はい、今日は元日。

京都に行く日です。

元旦は1月のことなんですよ。

なので、元日が正しい言い方です。

ママ達は間違えていましたけどね。

「ママー、パパはまだー？」

「またいつもの不幸じゃないの？（そのたびにフラグを建てるんだから……あらイヤダ、電撃撃ちたくなってきたじゃないの）」

なんか、ママが黒いです。

「まことちゃんーん!!」

あ、菜の花ちゃんたちがきましたね

「菜の花じゃなくてなのはなの」

「メタ発現乙です」

「二人とも、何の話をしているの？」

フェイトちゃん。それは聞いちゃいけないですよ。

おお、はやてちゃんたちも来たようですね……皆さんひどく疲れていますね。

「負負負、大掃除が……」

「やっと、終わったぜ……」

ああ、はやてちゃん主導の下、大掃除しましたか。さすが一家のヒエラルキー頂点ですね。

人数多いですが大丈夫でしょうか？

「揃ったみたいだし自己紹介でもしましょうか」

ママ、パパを忘れてますよ。

そういえば、マイクロバスを運転するとか言っていましたから準備に時間がかかってるんですね。

不幸じゃないじゃないですか……って、パパが不幸だったのは昔の話だって聞きましたよ。

今は能力を制御できているので運気を消していませんし。

ママはうっかりさんですねー

「それじゃあ、始めましての人もあるから改めて。上条美琴よ」
「娘の麻琴です」

「アリサ・バニングスです」
「月村すずかです」

あの二人がなのはちゃんの友達ですかー

「フェイト・T・ハラウオンです」
「アルフだ」

あの犬耳の女の人はフェイトちゃんの使い魔なんですかね？

「八神はやてです」
「あ、はやてちゃん」
「すずかちゃんひさしぶりやな」

お、意外な交友関係ですねー。

「シグナムだ」
「ヴィータだ」
「シャマルです」
「ザファイラという」

最後の犬男。できれば犬耳をしまってください。
なんか、ツツコミづらい。

「日輪ジャンゴです」

「ひゃっ!？」

あれ、すずかちゃん？

「どうかしたんか？」

「い、いえ……ビックリしたものですから」

「いや、何に？」

「……あー、そういえばあの婆さんが言っていたっけ」

はい？

「ああ、こっちの話」

なんか、聞くなって言っていますね……まあ、仕方が無いですか。

ゝすずかゝ

なぜか、あの人を見たたん……こう、怖いって感覚が……

「大丈夫か？」

「は、はい……」

ジャンゴ君は周りの誰にも聞かれないような声で話しかけてきています。

「すずかだっけ？」

「はい」

「たぶん、すずかがビックリしたのは俺の血のせいだと思うぞ」

「血ですか？」

まさかとは思いますが……私の正体に気がついていますか？

「俺の血は、ある生き物とかが苦手とする力があってな、それでだ
と思うぞ」

直接言わないあたりは言い方なんでしょうが……正直、安心できません。

「あ、もう二人来るの忘れてた」

突然、美琴さんがそんなことを言ったのでこの話は終わりになって
しまいました。

くジャンゴく

ああー、うまく説明しようと思ったんだけどなあ……

まあ、何とかしとかないと。

「あ、来た来た」

向こうのほうからは同い年くらいに見える女の子二人がきました。

なんか、実年齢と見た目があっていないような「小僧、命が惜しい
のか？」スイマセン。

「エヴァ、ちょっと過激じゃないの？」

「うるさい」

「……え、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル!？」

あ、フェイト知ってるの？

「あのーフェイトちゃん。この人そんなに有名なの？」

「有名も有名。真祖の吸血鬼よ!!」

あー、吸血鬼かー。真祖ってことは一番強いんだっけ？ たしか不老不死の。

ちなみに、形見のなかに、なんか、ヴァンパイアハンターの心得みたいなのがあって、そのなかに吸血鬼について書いてあったんだけど……なんか、自分が吸血鬼だったみたいに正確に書いてあるんだよな。

「魔法世界じゃ、ナマハゲのような存在よ!!?」

「ナマハゲって結局、いい妖怪じゃなかった？」

「私をナマハゲと一緒にするなー!!」

「私を無視するな」

バゴッ

「っ!?! 神楽坂明日菜!?! なにをする!?!」

「キティが無視するのが悪い」

「その名前で呼ぶな!!!!!!」

……なんだろう、いまの状態だと怖くないや。

「まったく、なんで私が京都に行かねばならんのだ」

「あら、前から行きたいって言っていたじゃない」

「ぐっ」

「ケケケ、素直ジャネエナ、御主人」

あ、人形？

「うるさいチャチャゼロ!!」

「ミコト、俺ノコト数ニイレナカタダロ」

「あ、無意識のうちに忘れてたわ……まあ、お酒は出してあげるから、ね」

「シヨウガネエナ」

『拙者もたしなみたいでござる』

オトフリート、お前酒飲むのかよ。

『たまにシャルマル殿と飲んでいるでござる』

「あ、そうなんだ」

「む、私の同属がなんで『二人』もいるんだ？」

は、二人？

すずかはたぶんそうだろうけど……あと一人は？

「何をアホみたいな顔を。お前のことだろう」

俺？

「ええええええええええ！？」

「しらなかったのか!？」

「初耳だぞ!!？」

「あきらかに吸血鬼特有の匂いが……む、ほかの匂いも混ざってるな……って、その銃は……なるほどやつの子孫か」

「ん、コレ知ってるの？」

「ああ、大昔にそいつを持っているやつをみたことがあってな……ヴァンパイアハンターの癖にヴァンパイアの姿になったり、吸血鬼をむやみに倒そうとしなかったり……たしか、ジャンゴと言ったな」

って、それって伝説のご先祖様！？

中世ヨーロッパの人だって聞いたぞ!?

「エヴァって、何歳なんだ？」

「女性に年を聞くのは失礼だぞ」

「いや、中世ヨーロッパの人間と知り合いな時点で些細な問題だと思っ」

「まったく、だがあえて答えない」
「オイ!!」

って、ご先祖様ヴァンパイアの力も持っていたって……何者？

「なるほどなあ、そのままあいつの名前を貰ったわけか」
「親にはあったことも無いけどな」
「それにしても懐かしいな」
「ケケケ、アノ白髪ツヨカッタナア」

戦ったことあるのかよ。

「そういえば、おてんこの奴はどうしている？」
「おてんこ？」
「む、奴はいないのか……それとも、どこかで咲いているのか」
なんだ、おてんこって？

『たぶん、太陽の精霊ね。あなたの使う太陽属性をつかさどっている精霊よ』

「へー」
『まあ、いてもいなくても同じような馬鹿よ』
「そこまで言うか!？」
『出来ることといえば、『エンチャント・ソル』『パイルドライバ』展開』『トランス・ソル』ぐらいなのよね』

全部、俺一人で出来てるよねそれ。

『今頃はどこかで咲いてるわよ』

だから、なんで咲いてるって表現なんだ!?
花か!? 花なのか!?

くすくす

「すずかちゃん……隠し事はしないって約束だったよね? よね?」

「あうー」

「な、なのはもうやめたほうが」

「あ、アリサの言うとおりだよ」

なのはちゃんが魔王になっちゃった。

自分の秘密は話しておいて、わたしのことは内緒だったから……

「すずかちゃん? ちょっと 頭、冷やそうか」

「ごめんなさいい!!!」

く 麻琴 く

あー、カオスだ

「おーい、麻琴ー」

「あ、パパー」

私のパパ。

熱血教師と評判の上条当麻がやってきました。

「なあ、なんだこのカオス」

「いつものコトデシヨ」

なのはちゃんが魔王になっていて、必死にそれを止めるフェイトちゃんとアリサちゃん。

すずかちゃんは涙目で謝っている。

ジャンゴ君はエヴァさんとはっきり話していて、嫉妬したはやてちゃんにOHANASHIされている。

八神家の皆さんははやてを止めることもできずに、ジャンゴ君を拘束している。言うことを聞かないと後が怖いからね。

エヴァさんはママ、チャチャゼロ、アスナにいじられている。

大方、ジャンゴ君のご主人様とはどんな関係だったかを根掘り葉掘り聞かれているんだろう。

しばらく出発できそうになくて上条さんとしては。

「不幸だ……」

そうだ、京都行こう b v 麻琴（後書き）

今回のキャラ紹介はこの人。

上条 麻琴

上条家の長女。見た目は黒髪的美琴。ポニーが好み。
生まれながらのレベル5（推定）

電撃に幻想殺しの効果が含まれるためAIM拡散力場が計測不能。

レールガンを撃つことは出来るが、年齢のせいかな定しない。
将来的には撃てる。

能力名『幻想雷砲』 げんそうらいほう と書いて イマジンキャ
ノン

黒い電撃を操る。基本は美琴と同じ。
ただし、電撃自体に幻想殺しの効果があるため、かなりのチート能力になっている。

本来の幻想殺しはオートで敵の強さ波長などを算出し、相殺していたが、麻琴の場合、強さ以外がオートで、強さは自身の電撃に依存する。

それでも、けっこうチート。

精霊にはとことん嫌われているので、魔法はあまり使えない。
そこらへんは父親譲りの身体強化系の適正と母親譲りの頭脳がある

ので余裕でカバーできたりする、本当に末恐ろしい子。

ぶっちゃけ、この小説内最強キャラ（予定）

遠距離、中距離、近距離で戦え、呪いも利かない、魔法はあらかた無効にできる。身体能力が高い。実弾兵器なども能力の前には無力。電池切れも魔力や気を使用することで大分改善されている。

チートでも、バグでもない、チートバグ。

麻琴の設定やりすぎたかな。

エヴァが麻帆良を出られる理由は次回か次々回でやります。

次回はバスの中での話を予定しております。

俺の出番少なくてね？ b y当麻（前書き）

短い。

いつにもまして、短い。

この小説は作者がノリで書いてますから。

そして、ラストであのキャラ登場。

俺の出番少なくてね？ b y当麻

く美琴く

「そういえば、麻琴……さっき調べたんだけど」

「ママ、どうかした？」

「元旦は元日の朝のことよ」

「か、上条さんわざとだもんねー」

「苦しい言い訳するな」

まったく、勉強は出来るのに根本的なところは父親似なのよね……

くジャンゴく

あー、麻琴の父親がきたから、そろそろ出発なんだけど……本当に父親なのか？

「な、なんでせうかその顔は……」

いや、20代前半に見えるんだよ……この家族は若さの秘法でも手に入れたのか？

「まあ、始めましての人もいるから一応自己紹介な。麻帆良学園高等部教師の上条当麻だ」

「か、上条当麻!？」

え、フェイト知ってるの？

「な、なんで赤き翼のメンバーがここに!？　　って、美琴って御坂美琴!？」

なんだ？　　赤き翼？

とりあえず、フェイト以外の反応が薄いな。

「いや、魔法関係者なら誰でも知ってるはずなんだけど……」

「いや、魔法関係者だけど、半年ぐらい前に魔法知ったばかりだぞ。そっちの世界の話にも疎いし」

「右に同じくや」

「今の世界の事情はよくしらねえんだよ」

「「同じく」」

俺とはやては魔法に出会ってからあまり時間たっていないんだよなー
ヴォルケンリッターは時代ごとに飛び飛びだからなー。

精霊獣は……興味ないと見た。魔法世界ってより、地球の存在なんだろうし。

「私も詳しく知らないの」

「私達はそもそも魔法使いじゃないわよ」

「そちらの話はあまりご存知ないんです」

なのは達も同じく知らないらしい。

「あー、興味ねえ」

アルフ……おまえ、フェイトの使い魔じゃないのかよ……

「うう……不幸だ」

なんか、ショックだったらしい。

（麻琴）

あー、うん。京都までマイクロバスです。

「魔法世界の英雄かー」

なのはちゃんたちは私からの説明でやっと分かってくれたみたいで
す。

「そんなに凄い人やったんやなあ……フェイトちゃん、デバイスの
開発者で気がつかへんのか？」

「いや……デバイスの開発者ってだけでビックリしていたから」

そういえば、エヴァさんがジャンゴ君とすずかちゃんを引っ張って
奥のほうへ行ってしまったね。

「まったく、ジャンゴ君は……そんなに金髪がええのかな？」

め、目が笑ってないよはやてちゃん……こ、これが噂に聞くヤンデ

レ……

ジャンゴ君……強く生きてっ！

（ジャンゴ）

な、なんだ……死亡フラグが建った気が……

「ちゃんと話を聞いているのか？」

「あ、スイマセン」

いま、エヴァさんから吸血鬼の力をコントロールする方法を教えてもらってます。

いや、俺のご先祖様が昔作ったらしい方法なんだけど、俺はその魔法を習得できればうまくコントロールできるらしい。

すずかは、エヴァさんがある程度の矯正とかをしている。

俺と違い、血が色濃く出ているらしく、人間と吸血鬼を切り替えられるこの魔法をつかえないらしい。

もともと、俺の中に流れている、吸血鬼にならない一族の血や、太陽仔などの特殊な条件を用いるらしいけど、さすがに色々改良されてるから、真祖とか一部を除けばこの魔法が使えるらしい。

リスクも大きいけど。

あ、俺の場合は逆に、吸血鬼化をできるようにするために使うためリスクが無い。

ってか元々人間のだからね。一割以下の吸血鬼の血を活性化させるための魔法って感じた。

エヴァさんは「真祖」の吸血鬼
すずかは「夜の一族」の吸血鬼
俺は「イモータル」の吸血鬼

なにが違うんだよ……とりあえず、俺は『一般的にヴァンパイアと
呼ばれる存在』だって。

コウモリに変身できたりするの？

というか、なんでこんなことしてるんだっけ？

くはやてく

「ぬふふふふふふ」

「はやてちゃんがこわれたなの」

「ちょ、どうするつもりよなのは!!」

「ほっとくしかないと上条さんはおもいますよ」

「あーどうにでもなれー」

なかよくお話……お話……そうだ、うちもOHANASHIをすれ
ばええんやな」

「後半、言葉に出てるの」

く美琴く

「いやー、あの子らは元気ねー」

「そうですねー」

「そんなのんきにしてていいのか？」

「ヴィータちゃんは少し固いですよー」

「シヤマル……でもはやてが」

「ヴィータ、ほうっておくのがベストだ」

「シグナムまで……そうだ、ザフィーラは？」

「ああ、アルフちゃんに子犬形態を教わっていますよ」

「……ああ、つこっみはアタシ一人なのかよ……」

く上条く

なんか盛り上がってるなー

「ケケケ、ダンナサビシソウダナ」

「そうかもなー、でも……不幸じゃないな」

「ソウイヤ、昔ハケツコウスゴカッタナ」

「あー、一度右手の制御が出来なくなった時かー」

「イキナリ金ドライガフツテキタトキハビックリシタゼ」

「どこのコントだよって思ったよ」

くジャンゴく

「あ、出来た」

「ほう、髪の色まで変わるのか」

「え!?!」

「鏡を見てみる」

手鏡を渡されたから見てみるけど……は、白髪に赤い瞳……

「今度は元に戻るか？」

「んー、『トランス解除』……お、できた」

「なんだつまらん」

なんだよ、つまらんって。

「ところで、お前にくつついてるそれはなんだ？」

「ん……って、木刀・正宗!？」

ついてきたのかよ……

「む、なかなか強力な一品だな。最高級の魔法具並みだぞ」

「ま、マジで!？」

本当に名匠が作ったものだったのか？

くユーノく

どうも、ユーノです。

いま、僕は魔法世界にいます。

いえ、いました。

「H A H A H A ! ! ! しっかり掴まってるよ坊主 ! ! !」
「おろしてー ! ! ? ! ! ? ! ! ?」

なぜか、赤き翼の一人。ジャック・ラカンさんに拉致られてしまいました。

「まったく、ラカンは強引ですね」
「おお、アル !」

こんどはアルビレオ・イマ ! ?

「な、なんで僕を ! ?」

「いえ、これから京都に向かうので……アリアドネーに道案内を出来そうな方を頼んだのですが……あなたしか適任がいなかったんですよ」

「だからって拉致する必要は ? !」

「「ノリで」」

「理不尽だあああああああああ ! ?」

くなのはく

「いま、ユーノ君の悲鳴が聞こえた気がしたの」
「私も聞こえた」

本当に俺らがここにいて良いのか？

～三人称～

「ん、あのこ……不思議な力を持っておりますなあ……飛び切り上等な浄化、それにアレは木刀・正宗」

木陰から、ジャンゴをじっと見つめる謎の影。

「うふふ、面白そうな子やな。素子も家を飛び出してしもうて退屈やったし……あの子を弟子にしてみるのもええなあ」

さあ、ジャンゴに謎の美女の魔の手？ が迫る！！

俺の出番少なくてね？ b v当麻（後書き）

キャラ紹介は前作主人公

上条 当麻

言わずと知れた幻想殺し。

美琴と結婚し、一児の父親。

見た目が20代前半ととんでもない。母親の遺伝と思われる。

幻想殺しは相殺という性質のため、内側にあった何か莫大な力を使っていた（作者の解釈）。

現在は魔法世界を幻想ではなく現実のものとするために、その力を魔法世界に移したため、竜王の顎などの力は使えない。

幻想殺しは魔力や気を相殺のためのエネルギー源にしている。

感卦法が使えるため、原作以上に強い。

ぶっちゃけ最強クラス。身体強化などを無視するので、魔法使いキラー

最強の男候補の一人。

赤き翼メンバー。

フラグ男なのは変わらないが、不幸がだいぶ軽減されている。

家庭では美琴とはいまだ新婚生活のノリ。

娘、麻琴はいい加減にしてくれと思ってるが無理だろう。

実は娘の電撃は防げない（幻想殺しの力が相殺し合うため）

あははは、カオスだ byフエイト（前書き）

暴走しまくり。

ノリで書いてるっていうか、短い時間の暇つぶし？

もう、カオス過ぎます。

あ、禁書新約3巻……上琴表紙がキタアアアア……！！

祝して、上琴で超電磁砲再編やろう！！

まあ、デジモンが無印終わったら投稿すると思う。

あまり期待しないでください。

あははは、カオスだ by フェイト

（フェイト）

「VIPすぎるでしょおおおおお！？」

なんなの！？

なんでジャック・ラカンにアルビレオ・イマが……まさかっ！？

「知り合いつて赤き翼！？」

「そうよー」

そんな軽く言わないでくださいよ！

一国を滅ぼせる戦力が終結……じゃなくて集結してるじゃないですか！？

「えっと、詠春さんはもともとここに住んでいるし、ガトウさんにタカミチは木乃香つれて少し遅れてくるって言ってたし、ナギ達はたぶんもういるだろうし、そういえばアリアドネーのほうからも後から来るって人がいたわね。あ、テオドラも来るって……」

「多すぎ！？　っていうかVIPって言葉じゃ片付けられないメンバーだ！？」

何人来る予定なんですか！？

「あははゝわかんない」

「ノリが軽すぎますよ!？」

ゝなのはゝ

フェイトちゃん、テンション高いの。

「ユーノ君、大丈夫？」

「き、気持ち悪い……」

たしかに、あれは酔うの……

「一体、ここ何が起るっていうんだ……？」

あ、真面目な表情なの……

「ん、新年会だぞ」

「ラカンさん!？ って、そのために!？」

「あ、ついでに初参りだ」

「そっちがついで!？」

ああ、シリアスじゃなかったの。

ゝジャンゴゝ

どうしてこうなった。

「うふふ、さあ、どこからでもかかってきてええで」

あはははは、なぜか神鳴流の先生に教わることに……しかも強制。

「つて、なんでオレなんかを……」

「おもしろそうやから」

「そんな理由で!？」

「いきますえー 斬岩剣!!!」

「ぐっ……」

「おおうけとめましたなー」

「誰か助けてエエ!!!」

不幸だああ!!!

（麻琴）

「「上条さんのアイデンティティが!?!」」

「あんたら何いってるのよ……」

「おー、当麻相変わらずだなー」

「お、ジャックもなー」

「ラカンさーんおひさー」

「お、麻琴も元気そうだな」

「お久しぶりです麻琴さん」

「ああ……久しぶり、変態」

「あの……なんかひどくないですか?」

「「うるさいロリコン」」

「キティまで……」

ザクッ

「私をその名で呼ぶなアルビレオ・イマ」

わぁ、もう少しで首が切れてたよ……

「アハハハハ……」

「おーい、当麻ー」

「お、ナギか、久しぶりだな」

「お久しぶりです」

「そういえば、ネギは？」

「あー、アリカが連れてった。友達もいるらしいし」

「あー、小太郎だっけ？」

「おう、ネギの幼馴染のアーニャも一緒にいっちゃった」

「向こうってことは……あ、そういえば木乃香ちゃんはまだ？」

「あーもうすぐだろ」

「おーい、麻琴ちゃん!!」

「あ、木乃香ちゃん!」

「木乃香、足速くない？」

「そんなことないでアスナー」

「なんで一緒に来なかったの？」

「おじいさまがまたお見合いの話を持ってきたんよ」

「へー、そうなんだー」

「ところで、ネギ君らがいるってホンマ？」

「うん、あの……木乃香ちゃん？」

「なんや？」

「目が怖いんだけど……」

「何のことやら？」

「愛は、自分の手で掴むもんやで」

「あ、はやてちゃん……」

「私の名前は八神はやて。よろしゅうな」

「うちは近衛木乃香。ちなみにここは私の実家や」

「愛とは？」

「自分の手で掴み、決して離さないもの」

ガシッ！！

「あははは……ヤンデレ同盟……」

「あなたも大変ね」

「アスナもみたいだね……」

「「はあ……」」

まあ、ジャンゴ君は大丈夫だろうけど……凄い鈍感ってわけでもないから……フラグも乱立してないみたいだし。

（麻琴、アンタがそれをいっちゃだめよ）

ん？ ママ？

まあいいや。

とにかく、問題はネギだ……あのフラグ魔をどうするか……

（だから、アンタは人のこと言えないのよ！！ 父親に似てフラグ魔。しかも男女問わないって……）

さっきから、なんか変なテレパシーが聞こえる気がするんだけど？

気のせいだよね。

くジャンゴく

「し、死ぬかと思った……」

「ビックリしたわー。まさか、斬魔剣以外の技をこの短時間で覚えるとは……さすがは持つものの潜在能力を高めるといわれる木刀・正宗。使い手も才能があるようやしの」

「もう……だめ……」

死ぬ……さようなら………

「しんじゃだめやああ……!!」

ゴフッ!?

なら、とどめささないでよ

……はやて

くフェイトく

カオスーカオスー

この世はカオスー

「あははははははは」

「フェイトちゃんが壊れちゃったの」

もう、ツツコミきれないんだもん。

「フェイトちゃん、フェイトちゃんがしつかりしなかったらだれがツツコむの?!」

はっ!? そうだ、私がしつかりしなきゃいけないんだ!!

「ありがとうなのは! 私、目が覚めたよ!!」

やるぞー!!!!

(……頑張ってねフェイトちゃん)

ん、なのはは手伝ってくれないの?

「魔法世界の話は知らないからツツコミようがないの」
ですよー

あははは、カオスだ by フェイト（後書き）

今回はこの人 まあ、もう誰がキャラ紹介に来るか分かるよね。

フェイト・T・ハラウオン

ほぼ、原作どおりの生い立ち。

ただし、魔法などはネギまに合わせてあるよ。

雷の魔力変換資質もあるよ。

前に言ったかも知れないけど、この世界の変換資質は精霊等の力を借りずに属性を変更できる先天的能力のこと。

そして、この作品内ではフェイトは超苦労人タイプ。

ツツコミをしたり、フォローしたり、まあ色々やるひと。

そのせいで段々壊れてきてる。

最近、癒しが欲しい。

犬耳とか結構好きだったりします。（分かる人にはわかるよね）

ネギと麻琴が強力な電撃系の技を使いまくるので戦闘では目立たないだろうな。戦闘も滅多にないんだけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0240y/>

まほらんぶる(仮)

2011年11月13日17時35分発行